

## 横浜国立大学生の英作文上の問題に対応する指導

### YNU Students' Typical Needs in English Composition and the Effective Teaching Methods

横浜国立大学 大学教育総合センター

渡辺 雅仁

キーワード: 英作文指導 流暢さ 正確さ エッセイライティング

Keywords: teaching composition, fluency, accuracy, essay writing, authenticity

#### Abstract

English Practice 1W, an English course for the freshman students of YNU, aims at reviewing the English grammar they have learned in junior and senior high school English classes, and achieving compositional skills for short essays. You can see their typical needs are classified into five categories, i.e., 1) the need for language fluency, 2) the need for the basic intra-paragraph organization skills, 3) the need for logical arrangement of paragraphs, 4) the need for communicative writing, and 5) the need for autonomous writing. I'd like to propose three types of adjustments for these five categories, i.e., 1) evaluation based on the number of both *outbound* and *inbound* messages written, 2) content-based teacher guidance, and 3) self-management of composition based on the checklists before and after the draft.

#### 1. はじめに

横浜国立大学の英語実習 1W は「高校卒業までに学習した英文法の知識に基づいた、正確な作文力の養成」を授業の目的とし、より具体的には、「文レベルの作文が適切に行えるだけの文法知識を身につけるとともに、複数の文をまとめて、基本構成を含むパラグラフやエッセイも適宜作文できるようになる」ことを到達目標としている。

<sup>1</sup>本稿では本学の経営学部の1年生を対象とした英語実習 1W の指導を通して、学生の英作文力について分析を行い、指摘された問題点に対応する具体的な指導法に関する活動報告を紹介する。

---

<sup>1</sup> 英語教育部作成「英語実習 1W 統一シラバス」より。

## 2. 横浜国立大学生の英作文の問題点

### 2-1 発信する数と量の不足

日本人英語学習者について、文法訳読式の授業を通じ、英文の正確さ (accuracy) はある程度達成されているものの、状況に合った適切な英文を短い反応時間で発信する流暢さ (fluency) が不十分であることについて、これまで幾度となく指摘されてきた。間違えることを恐れずコミュニケーションの目的を英語で達成しようとする語学力の養成はコミュニケーション的アプローチの根幹をなす考え方だが、和文英訳式の英作文の授業を積み重ねてきた大半の日本人学習者にとってなかなか到達することが難しい。

コミュニケーションを目的とした英作文活動を目指し、この問題を改善すべく、2000年から導入しているのが、Project Ibunka という、異文化交流プロジェクトである。<sup>2</sup>これは、海外の英語教育諸機関と連携し、さまざまなトピックについて、インターネット上に設置した、専用の掲示板システム (電子掲示板) を用いて異文化交流を行うものである。システムでは、学習者が作成した作文を掲示板に投稿すると、参加者全員が閲覧できるよう、掲示板に実名および顔写真付きで表示される。また、参加者間の交流が進むようそれぞれの投稿についてコメントの投稿もできる。

2008年度実施の Project Ibunka 2008 は、以下のように8ヶ国から722名の参加者があった。表はこの参加者の国別の割合を示している。

#### (1) Project Ibunka 2008 国別参加者数と全体に占める割合

国名	参加者数	%
ブルキナファソ <sup>3</sup>	38	5.3%
デンマーク	27	3.7%
インドネシア	158	21.9%
日本	347	48.1%
韓国	11	1.5%
台湾	95	13.2%
アラブ首長国連邦	33	4.6%
米国	13	1.8%
合計	722	100.0%

Project Ibunka 2008 では3ヶ月間に4,362の投稿があった。その中で、投稿数の数が多い者を順に21名まで抽出して並べ、出身国を調査したのが次表である。21名の中でインドネシアからの参加者の割合が際立って高いことがわかる。(1)が示すように、日本人参加者は全体の約半数を占めるが、投稿数の数では上位21名中に3名しか登場していない:

<sup>2</sup> Project Ibunka の詳細については、Watanabe (2006)およびWatanabe (2008)を参照のこと。

<sup>3</sup> 西アフリカ内陸部の国家。首都はワガドゥガー。

## (2) Project Ibunka 2008 個人投稿数

順位	投稿数	国名
1	89	インドネシア
2	60	デンマーク
3	50	インドネシア
4	37	インドネシア
5	36	インドネシア
6	30	インドネシア
6	30	インドネシア
8	25	インドネシア
9	24	インドネシア
10	23	日本
10	23	インドネシア
12	22	インドネシア
13	21	インドネシア
13	21	日本
13	21	デンマーク
16	20	デンマーク
16	20	インドネシア
18	19	日本
18	19	デンマーク
18	19	台湾
21	18	日本

上記のような国際的な比較は、日本人英語学習者の流暢さの養成が如何に急務であるかを物語っている。

## 2-2 段落の基本構成の理解が乏しい

エッセイライティングにおいて、通常、1つの段落（パラグラフ）には1つの主張や考えが完結するように複数の文がまとめられている。そのため、「トピックセンテンス—指示文—まとめ文」のように文を構成する手法がよく用いられる。しかし、実際には、この段落の基本構成を尊重せず、思い浮かんだことを羅列して段落を構成してしまうことが多い。

以下は本学1年生の作文例である：

## (3) 作文例3

People in the city do not have much communication. For example, we can live without knowing about any neighbors around us. Life in the city is difficult. There are a lot of crimes which we can see on TV news every day. City life makes people lazy because city life is too convenient. There are a lot of people who do not exercise enough. A lot of buildings around us are dangerous. For example, if we have a pretty strong earthquake, a lot of people will be killed. Also, the air in the city life is polluted.

都会生活の問題点を指摘したい、という書き手の意図はわかるものの、1つのパラグラフの中に、「コミュニケーションの不足、犯罪の多発、便利すぎることもたらす弊害、高層

ビルの地震時の危険、大気汚染」等々、多くのトピックを盛り込み過ぎている。パラグラフの最初の1文から、このパラグラフ全体は、都市のコミュニケーション不足について述べられているのかのように読み手は予測するが、実際には、都市のさまざまな問題がリストされているだけで、パラグラフには、トピックセンテンスも支持文もまとめ文もない。

### 2-3 段落を論理的に配置できない

入学してくる学生の大半が、日本語においても、複数の段落を適切に配置して論理的に文章を構成する練習を十分に積み重ねてきていない。「起承転結」に代表される、文章の論理的な構成は、説得力のある文章を作成する際に欠かせない。以下は本学1年生の作文例である。<sup>4</sup>

#### (4) 作文例 1

##### Masuzushi and Ekiben

1)

In this article, I'd like to introduce Masuzushi and Ekiben to you.

2)

First, Masuzushi is one of the specialty products of my hometown, Toyama Prefecture, Japan. "Masu" means trout and "zushi" means sushi. Thus, Masuzushi is a kind of sushi that has sliced pickled trout on the top of sushi-rice. When you have it for the first time, you'll be surprised at bamboo leaves surrounding the sushi and its round shape.

3)

Masuzushi consists of three major ingredients: rice, trout, and vinegar. Rice is one of the most important ingredients of Masuzushi. It should be the locally-grown Koshihikari. Toyama prefecture is famous as a production center of nice rice. Clean melted snow water from Tateyama Mountains is inevitable in order to grow this high quality rice. The fish is important, too. Skilled chefs single the most fresh trout out from others with deliberation. It should contain plenty of fat and firm flesh. The vinegar and the bamboo-leaves are also important.

4)

By the way, Masuzushi is also known as Ekiben. Ekiben is a boxed meal that are sold at stations in Japan. Many stations offer Ekiben with local specialties. For example, Masuzushi of Toyama, Ika-Meshi of Hokkaido, Touge-no-Kamameshi of Gunma, Tako-Meshi of Hieoshima, Huku-meshi of Fukuoka and so on. Eating local Ekiben makes the journey even more enjoyable and memorable. Why don't you take Ekiben when you visit Japan?

この作文のテーマは「海外の人に日本文化を紹介する」であった。やや例が極端ではあるが、第1段落は1文のみからなり、論理的段落構成の基本となる「段落」について、理解していないことがわかる。また、タイトルが示すように、*Masuzushi* と *Ekiben* という2つのトピックを取り上げている。*Masuzushi*については、第1段落から第3段落を用い

<sup>4</sup>本稿に登場する作文はすべて本学の英語実習1Wにおいて学生が実際に作成したものをもとに、本稿の趣旨に添うように著者が改編したものである。

て、それなりの論旨が展開するが、*Ekiben* については、第 4 段落でようやく登場し、しかも、各地の *Ekiben* の名称を羅列に終始し、第 3 段落までの内容と関連してこない。

#### 2-4 読み手を意識して内容を構成できない

読み手にわかりやすい文章は、読み手を正しく意識しなければ作りえない。同じ文化を共有する者同士であっても、コミュニケーションの目的を十分達成するには、テーマを絞り込み、わかりやすい解説を段落ごとに積み重ねる必要がある。ましてや文化の異なる海外の読み手を対象として発信する際には、書き手の持つ背景知識に依存しないよう注意しなければならない。

以下は、本学 1 年生の作文例である：

##### (5) 作文例 2

#### Kawaii culture

1)

I'd like to try to introduce about Kawaii movement, which is one of the characteristics of young Japanese culture. I'm going to tell you about why Kawaii attitude grows in Japan.

2)

The word, Kwaii, is used in variety of ways. It means "cute," "cool," or even "funny" depending on the situation. We can find some positive sense in it. Japanese girls love to say Kawaii when they find something good to see. The Kawaii movement is deeply related with Japanese animation Manga culture. For example, maybe there are no girls who don't know about "Hallo Kitty". She is one of the representatives of Kawaii figures. She has everything that can be regarded as Kawaii. She doesn't complain to anyone. She is always smiling to us. We want to protect her like a small girl.

3)

As the Kawaii movement grows bigger, girls try to be more Kawaii. The big business chances open up here. The success of Tokyo Girls Collection (TGC) represents this well. The TGC is a one of the biggest fashion shows in Japan. Popular models and actresses perform on TGC. Girls from all over Japan come to Yokohama Arena to see the latest Kawaii fashions. This movement is getting more attention from European fashionista.

4)

So in the future, this movement will spread all over the world soon. The new generations who are sensitive to the international fashion movement have already noticed how Kawaii is wonderful. Consumers, not designers, create this movement. They are ordinary girls who love to dress themselves up in Kawaii clothing. Why don't you create Kawaii culture with us?

作文例 1 と同様に、この作文のテーマは「海外の人に日本文化を紹介する」であった。全般的にはよく書かけている。文法上の誤りはほとんどなく、文章の構成力もそれなりに認められる。しかし、*Hello Kitty* や *Tokyo Girls Collection* といった事柄について十分理解していることを前提としているため、海外からの参加者にわかりやすい文章を書く、という視点は持っていない。

## 2-5 学習の自律性の欠如

教員の指導の強さに反比例するように学習者の自律性は損なわれてしまう。授業が終わった後でも、自分の英作文に対し客観的に問題点を把握し、教員の指導を待たずにこれを改善できるような自律性を学習者に持たせたい。文レベルの和文英訳主体の授業しか受けてこなかった本学の1年生に対し、エッセイライティングを指導しても、なかなか自律性の涵養には至らない。

## 3. 問題点を克服する指導

上述した横浜国立大学生の英作文上の問題点はどのような指導によって克服されるのだろうか。学生の英作文に教員が惜しみなく赤い色で添削を行うことを英作文の指導とする考え方は今も根強く存在している。過去にもさまざまに指摘されてきてはいるが、このような添削指導には以下のような問題点がある：

### (6) 教員の赤入れによる添削指導の問題点

- 1) 前章で指摘した数と量の問題の解決策にならない。数と量の問題は「誤りを恐れずに」作文することを前提としているからである。誤りのない正しい形を追求しすぎると、学習者の流暢さが損なわれてしまう。
- 2) すぐれた作文はおおまかに、「全体の構成の検討—下書きの作成—推敲—仕上げ」のようなプロセスを経て作られる。作文にはプロセスに応じて、抑えるべき点を明確に限定した指導が必要で、全体の構成がうまくできていない作文について、細かな文法や綴りの誤りを指摘しても効率の良い指導にはならない。
- 3) 学習者が自分の作文について客観的に評価、検討を行い、問題点を自律的に修正する訓練とはならない。

前章で指摘した横浜国立大学生の作文上の問題に対応しつつ、以下に具体的な指導方法をいくつか提案する。

### 3-1 投稿数に基づく評価

2010年度後期、担当の英語実習1Wでは、以下のA, Bを単位取得のための必要条件とした：

#### (7) 単位取得のための必要条件

##### A. 3つのテーマに関する作文本体の投稿の完了

- 1) School Life (学校生活, 3段落構成): 200語以上
- 2) Cultures (日本文化を分かりやすく海外の人に紹介する, 4段落構成): 300語以上 [1回以上の添削を受け, 1回以上書き直しを行う]
- 3) Social Issues (社会問題とその解決方法, 5段落構成): 400語以上 [作文の計画表,

点検表を添付する]

- B. 3つのテーマのそれぞれに自分以外の投稿を読み, 100語以上のコメントを少なくとも2つずつ投稿

活動Aの3つの作文については, 教員として指導を行ったが, Bについては一切指導を行わなかった。これにより, コメント作成を学習者が自己の裁量のみで自由に行えるようになった。文法上の誤りのある文でも, 言いたいことが十分伝わらなければ, 他の参加者からコメントはもらえない。こうして, 作文がすぐれたものであるかどうかの評価は, 教員のみならず, 他の参加者からのコメント投稿の数によっても示されることになった。

この必要条件を満たした学習者の活動について以下のように評点を行った:

(8) 評点

A. 内容に基づく評価 75点満点

- 1) School Life 20点満点
- 2) Cultures 25点満点
- 3) Social Issues 30点満点

B. 投稿数に基づく評価

- 1) コメントを含むすべての掲示板への投稿1つにつき1点
- 2) 他の参加者から自分あてに来た投稿1つにつき1点

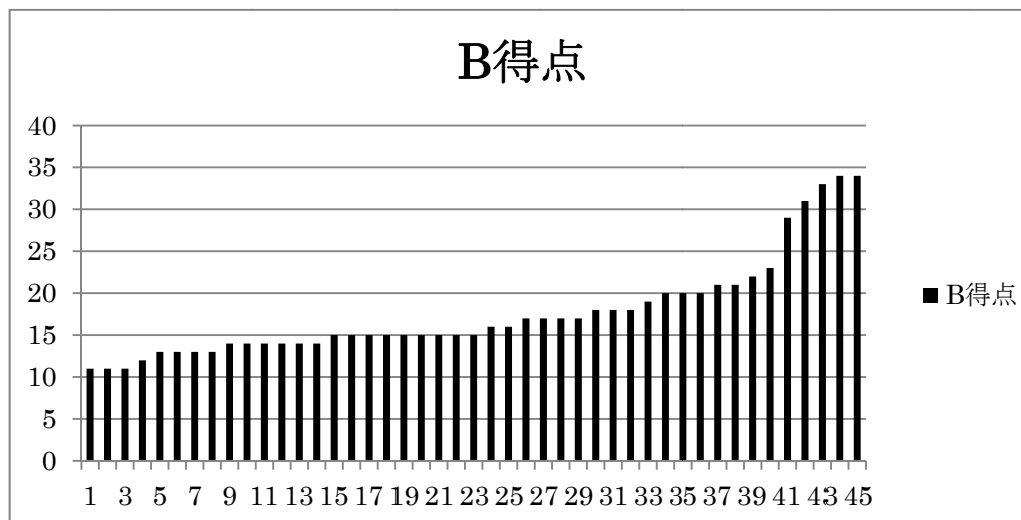
このように授業では, 学習者にコミュニケーション活動をより意識させるため, 成績の評価を, 学習者自身が作成した作文<sup>5</sup>のみならず, この学習者が他の参加者からもらったコメント<sup>6</sup>の数も考慮して行った。こうすることで, 他の参加者からより多くのコメントがもらえるよう, 読み手を意識した投稿を行うようになる。

2010年度後期は2クラスで45名の単位取得者がいた。その全員について「B. 投稿数に基づく評価」を算出し, 得点の下位の者から上位の者へと並べてグラフ化すると以下のようなになる:

<sup>5</sup>便宜上, inbound message のように言及される。

<sup>6</sup>便宜上, outbound message のように言及される。

## (9) B 得点



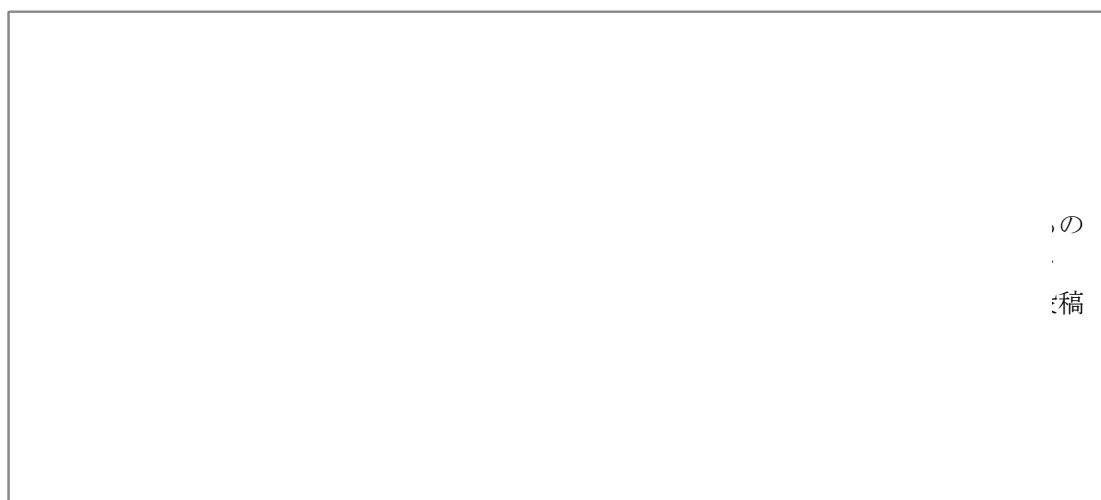
平均: 17.8      最小値: 11      最大値: 34      標準偏差: 5.97

投稿数平均: 11.4      コメント取得数平均: 6.3

単位取得のための必要条件には、他の参加者からのコメント数は含まれていない。必要条件のみを満たすのであれば、B得点は(7)のAおよびBの投稿により、9点が最低の得点となる。グラフの下にまとめた投稿数、コメント取得数に関する数値は、大半の学生が必要条件に加えて自発的に投稿を行い、他の参加者からも何らかのコメントを取得していることを示している。

(9)のB得点のグラフにおける45名に対応するように、全体の投稿数の中で、自分の投稿と、他者からのコメントの数について、パーセンテージで比較すると以下ようになる:

## (10) 他者からのコメントと自分の投稿の全体に対する割合



調査した45名はB得点順に並べている。グラフに重ねた黒い直線が示すように、B得



点の高い学生ほど、効率よく他者からのコメントを取得し、コミュニケーション活動がより活発化していることがわかる。

### 3-2 内容に焦点を当てた添削指導

前章で見たように、日本人英語学習者は大学生のレベルでも段落を論理的に配置する訓練が不足している。担当の英語実習 1W では、以下のように、全体の総語数の目安とともに、基本的な段落構成を最初に示すことにしている：

#### (11) 総語数と基本的な段落構成

##### 1) School Life 200 語以上

第一段落：簡潔な自己紹介。今日、取り上げたい場所はどこなのかを最後に記す

第二段落：その場所はどのような場所なのかを記述する

第三段落：その場所と自分とのかかわり

##### 2) Cultures 300 語以上

第一段落：これから何について書くのか、なぜこのことについて書きたいのかを簡単にまとめる。

第二段落：紹介したい日本文化についての全般的な記述。

第三段落：その日本文化と自分との関わり。具体的なエピソードを記述する。

第四段落：全体のまとめ。これからこの日本文化はどうなっていくと考えられるか。

##### 3) Social Issues 400 語以上

第一段落：取り上げる社会問題とは何か。概略の説明

第二段落：その解決策 1 First, ...

第三段落：その解決策 2 Second, ...

第四段落：その解決策 3 Third, ...

第五段落：まとめ

教員による作文の添削および評価は、あらかじめ指定した段落構成に沿っているかどうかに関心を持って行う。

以下は、(4)の学生の作文に対する添削の指示例である。指示は、どの部分をどのように書き直すかについて具体的に述べている：

#### (12) 添削指示例

全体的に良くできています。加点 5 点

「かわいい文化」を紹介する過程で、ハローキティまではよくできていますが、Tokyo Girls Collection になると、これがどのように「かわいい文化」と結びつくのかがわかりにくくなっています。今回は、Tokyo Girls Collection をメインにして、その解説を通じて最後のまとめで Kawaii 文化を述べるように書き直してください。

タイトル: Tokyo Girls Collection

第一段落: Tokyo Girls Collection とはどのようなファッションショーか。写真を用いて概略を解説する。Tokyo Girls Collection について書きたい。その理由。

減点 5 点

第二段落: Tokyo Girls Collection の特徴を 3 つくらいに絞り、First, ... Second, ... , Third, ... のようにまとめる。パリやニューヨークのファッションショー

とどのように異なるのか。減点 5 点

第三段落: Tokyo Girls Collection に対する自分の考え。この企画から何を学んだか。何に感動したか。どのような点で共感できるのか。この企画の成功の裏にある Kawaii 文化とは何なのか、自分の視点でまとめる。減点 5 点

第四段落: Tokyo Girls Collection から見えてくる Kawaii 文化の今後についてまとめる。減点 5 点

持ち点 20 点, 減点 15 点, 加点 5 点 評価 10 点

上で「減点」となっている部分については指示通り書き直せば減点は取り消される。指示に基づいて書き直した文章が最終的な評価点となる。

### 3-3 計画表と確認表による作文の自己管理

最終の作文テーマである Social Issues (社会問題とその解決方法, 5 段落構成) については, 1) 作文計画表, 2) 作文本体, 3) 作文確認表, 4) 投稿, のようなステップを経て作文させている。これは, 先に指摘した「全体の構成の検討—下書きの作成—推敲—仕上げ」というプロセスに沿って, 教員に依存することなく, 自主的に作文活動を行わせることを目指したものである。

作文計画表は実際に英語で書き始める前に, それぞれの段落の内容について, 以下のよう  
に, 日本語で 100~150 字程度で概要をまとめさせる活動である。

#### (13) 作文計画表

- ★タイトル: 全体をまとめるような効果的なもの (日本語)
- ☆第一段落: 取り上げる社会問題とは何か.
- ☆第二段落: その解決策 となる取り組み 1
- ☆第三段落: その解決策 となる取り組み 2
- ☆第四段落: その解決策 となる取り組み 3
- ☆第五段落: まとめ

作文計画表はブレインストーミングを行うように, 日本語による概要作成のプロセスを通じて, 作文の骨格が定めることを目的としている。計画表を完成させてから, 実際に作文本体に取り掛かる。作文が完了した後, 作文確認表より適切に作文が行われているかを確認する。作文確認表は自己採点できるよう, 項目ごとに採点の基準が与えられている。今回はことに, 「トピックセンテンス—指示文—まとめ文」のような段落の基本構成について理解が行われているかについて, 自己点検できるよう確認項目を作成した。(14)は第一段落の確認項目で, 同様の確認をすべての段落で行う。

#### (14) 作文確認表

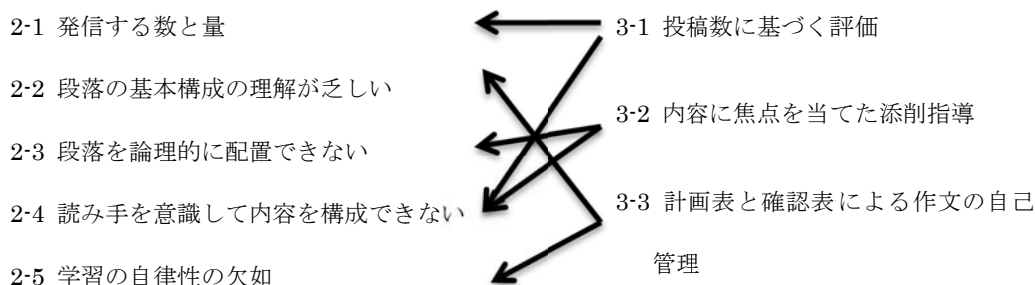
- ☆第一段落: 取り上げる社会問題とは何か.
- トピック文(英語。段落の最初の文をそのまま抜き出す。1 文のみ)
- まとめ文(英語。段落の最後の文をそのまま抜き出す。1 文のみ)
- 確認! トピック文の方がまとめ文より (短い・長い) [長い場合: -2 点]
- 確認! トピック文とまとめ文はほぼ (同じ内容・異なる) [異なる場合: -2 点]

抜き出したトピック文とまとめ文について長さと内容を比較し、減点の対象となることが明らかな場合、作文を改編しなければならない。学習者は全体の持ち点 25 点から、減点された得点の合計を減じ、課題に対する評価点を自ら算出して、作文確認表を提出する。課題 Social Issues は全 5 段落構成であるため、5 つの段落で繰り返し段落の基本構成を確認しなければならない。教員は、提出された確認表を基に、学習者が正しく自己採点を行っているかを検証する。行われていない場合には適宜、学習者による自己採点を修正することもある。

#### 4. まとめ

「2. 現代G P 採択事業期間中の」で指摘した問題点と「3. 採択事業の成果と事業終了後の取組」で提案した解決策とは次のように関係づけられる:

##### (15) 問題点と解決策



矢印が示すように、提案した 3 つの解決策により問題点が全般的に解消あるいは改善されうる可能性が伺える。

しかし、現実には以下のように、依然として未解決であったり、解決策によって新たに生じたりした問題点も指摘できる:

##### (16) 更に改善が必要なことから

- 1) 全般的に細かな評価基準を設定しすぎていて、学習者が「書きたい」という内面の欲求からではなく、「減点されたくない」という思いから学習が行われる
- 2) 他者からのコメントがもらえないために動機付けを失う
- 3) コメント数を増やそうとして親しい友人の間のみでしか交流しようとししない
- 4) すべての課題について、教員が段落数とその論理構造をあらかじめ指定している
- 5) 全体を大きく書き直す変更は学習者の負担が大きい
- 6) 計画表を日本語で作成させたため、日本語に強く依存した英文となる
- 7) 確認表の自己採点では大きな問題はないものの、内容の掘り下げ方が不十分な英文がある

学習者の興味や関心に制限を加えないオーセンティックな活動が、学習の活性化には欠

かせない。一方、学習者のニーズに対応するように、教員が指導上の効率を上げようとすると、オーセンティックな活動は制限されてしまう。上記の問題点は両者のバランスが学習のさまざまな場面で崩れることから生じている。半期 15 回の授業では多くを期待することは難しい。しかし、問題が改善されるよう、今後も学習者のニーズ分析と新しい解決策の模索を継続して行きたい。

#### 参考文献

Watanabe, Masahito. (2006) Better E-moderation for OET and Project Ibunka. 千葉県浦安市: 明海大学外国語学部論集第 17 集. pp.33-66

一. (2008) Project Ibunka: An International Collaborative Online Project. 福岡市: World CALL 2008 Proceedings. pp. 205-207